

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00563

研究課題名(和文) 発話事象概念の認知的言語類型論研究

研究課題名(英文) A cognitive study on language typology of speech event conception

研究代表者

井筒 勝信 (Izutsu, Katsunobu)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：70322865

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：対話乃至独話の話者が自ら参与する「発話」という出来事として何らかの形で想起する概念化を発話事象概念と称して言語によるその多様性を明らかにし、その類型の可能性について考察・検討した。認知言語学では舞台を手本にしたモデルが考案されて来たが、本研究が扱った僅か10余りの言語に見られる発話事象概念の多様性さえも十分には捉えきれず、関係する言語の差異・多様性を説明することが出来ない。そこで本研究では、僅かな言語サンプルながら、当該事象に関わる言語表現の概念化を記述・分析し、見出される発話事象概念の類型を描き出すと共に、言語普遍的というよりは言語相対的な側面からそれら類型の共通性を捉える立場を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、言語の表現形式、それにより表象される概念化、達成が意図される目的、といった言語コミュニケーション全般に関わる理解を大きく押し広げることに寄与する点で学術的意義がある。同時に、同一あるいは類似した言語体系内での誤解や誤伝達に加えて、異なる言語・文化・社会の間で生じ得る意思疎通上の問題の新たな掘り起こし、記述、分析、解明のために役立つ基礎研究の一部となり得る点で社会的意義は大きい。言語による概念化の違いに由来する、もしくはそうした違いを生じる、発話事象に関わる社会・文化的な前提、価値観、世界観といったものの理解とそこに含意され、工夫され得る人間行動的な方策の社会的な応用も期待される。

研究成果の概要(英文)：This study explored variability and typological possibility of a speech event conception: the conceptualization of a speech event in which speakers envisage themselves as participating while speaking. Cognitive linguistics has posited a stage-based model of speech event, but it does not, unfortunately, account for the diversity of speech event conceptions found even in only some more than ten languages examined in this study, let alone linguistic differences closely associated with those diverse event conceptions in each language. This study examined specific expressions that involve speech events as integral part of their meaning and function in the relevant languages, thereby elucidating possible conceptualization types of speech event and proposing to view the similarities (and dissimilarities) among those types from the perspective of linguistic relativity rather than linguistic universality.

研究分野：言語学

キーワード：発話事象 直示 語用論的標識 話者 聴者 (問)主観性 談話

1. 研究開始当初の背景

会話をする際、話者は自らが参与する発話の場面の概念化を何らかの形で想起していると考えられ、本研究はこれを「発話事象概念」と称する。直示表現のような例を除いて、言語形式が発話事象概念自体を直に表現することは少ないためか、個別言語の研究においても対照的な言語研究においても、その構造的多様性が注目されることは少ないが、語彙的あるいは文法的な形式によって喚起・指示される意味と同様に、発話事象概念も各々の言語で一定の概念構造を持ち、それらは言語によってある程度の多様性を示すことに疑いはない。しかしながら、語彙・文法形式が類型論的研究で概念構造という観点から盛んに分析されて来たのとは対照的に、発話事象概念の構造的多様性が類型論的研究の本格的な対象となることは、これまで極めて稀であった。

2. 研究の目的

本研究は、認知言語学と言語類型論の橋渡しとなることが期待される認知的言語類型論(Horie 2003 等)において、個々の言語の文法に絶大な影響を与えていると思われる発話事象概念の類型論的な記述と分析によって、直示的表現並びに語用標識・不変化詞に跨る広範な概念化領域の解明のための一助となることを目的とする。認知言語学と言語類型論は、本来的には親和性の高い内容を扱い、双方の成果は互いの成果に多くの含意と影響をもたらすことが期待されるが、前者は意味・機能に、後者は言語形式に強い指向性を示すため、別々の研究分野を構成するのが現状である(Auwers and Nuyts 2010)。認知的な多様性という観点は、空間表現を始めとする語彙・文法形式の研究によって明示され、言語構造そのものに加えて、それらが表象する意味や機能にも多様性が存在すること、そしてそれらは類型論の対象となり得ることが示されて来た(Levinson 2003)。本研究は、発話事象概念に見られる多様性を典型的に捉えることに寄与する。

3. 研究の方法

本研究は、英・独・仏語と日本語・韓国語・アイヌ語を中心に、直示的表現の分析を援用しながら、語用標識・不変化詞の意味と機能の記述と分析を進め、それらの言語に共通する発話事象概念の構造と個々の言語に見られる多様性を明らかにする。これらの異同に関しては、(i)話者と聴者は向き合っている(face to face)のか、横に並んでいる(side by side)のか、(ii)舞台と話者・聴者にはどのように仕切り(partitioning)が設けられるのか、(iii)話者・聴者はそれぞれどのような力学的事象に参与するものとして概念化されるのかといった点が重要である。発話事象概念の基本構造として、舞台モデル(Langacker 1991)やその修正版(Verhagen 2005)が提案されて来たが、これらの点は十分に考慮されているとは言い難い。

そこで、コーパスと母語話者へ聞き取りによって、上記の言語の当該表現データを相当数収集し、上記(i)-(iii)等の観点から意味と機能の記述・分析を行う。この作業は、主に二つのグループに分けて行う。英・独・仏三言語と日本語の語用標識・不変化詞に関しては、これまでそれらの研究を共同で進めて来た井筒美津子氏と研究代表者とが主に担当し、日・韓・アイヌ語の語用標識・不変化詞に関しては、研究代表者が小熊猛氏・金容澤氏と協力して従事する。その他の直示的表現の補足的調査並びに分析は、関連する研究にこれまでに従事して来た小熊猛氏と研究代表者が取り組む。これらの作業は主に最初の2年間で推し進める。

本研究は、上記の六言語の語用標識・不変化詞の意味と機能の記述・分析と直示的表現の分析から得られた発話事象概念の構造的な理解を汎用性の高いものとするために、上記の言語と類型の異なるウェールズ語・バスク語、モンゴル語・チベット語・中国語等から当該表現のデータを収集し、そこから得られた結果を基に発話事象概念の類型化を行うところまでを目標とする。ウェールズ語・バスク語については、以前、実地調査と文献調査に従事した研究代表者が、モンゴル語・チベット語・中国語については、勤務校で母語話者が容易に得られる小熊猛氏が、主にデータ収集を行い、井筒美津子氏・金容澤氏の協力を得て、研究代表者と小熊猛氏がデータの意味・機能の記述と分析を行う。これらの作業には、3年目と4年目の2年を掛けて取り組む。

4. 研究成果

1年目は、「発話事象概念」(話者が会話をする際に想起している、自らが参与する発話の場面の概念化)の言語により異なる構造と、多くの言語に共通する構造とを明らかにし、発話事象概念の類型を整理することによって、認知的言語類型論に寄与するという本研究の目的を達成するための第一歩として、主に五つの研究に従事した。(1)英語、日本語、韓国語の未来の出来事を指示する表現(現在時制、証拠性、法などの表現形式)、(2)ごく最近の経験を聞き手に報告し、話題として共有しようとする際に用いられやすい表現形式、(3)一身上の経験を打ち明ける際に用いられやすい表現形式、(4)アイヌ語の文末で用いられる語用標識、(5)英語、日本語、スペイン語、ドイツ語の語用標識、それぞれの意味並びに機能の分析がそれらに該当し、いずれも、コーパス・データ(インターネット検索によって収集されたものを含む)や母語話者への聞き取りを通して収集した言語資料を中心に用いた。これら一連の分析から、本研究課題の核となる発話事象概念に働く要素として、視点(語用論的機能に根付く概念的視点)、保持様態(自己経験保持

の概念化)、整序(概念内容提示の順序立て)、相互作用(話者の聞き手とのやり取りの概念化)の問題を掘り下げることが出来た。

2年目は、本課題の目標の一つ、「発話事象概念」の言語により異なる構造、言語に共通する構造を明らかにすることを目指し、英語、ドイツ語、フランス語、アイヌ語、日本語、韓国語を主たる対象としてデータ収集並びに意味・機能分析を行うことで、以下に述べる六つの研究に従事した。第一に、昨年に引き続いて、(1)「アイヌ語の文末で用いられる語用標識」、(2)「ごく最近の経験を聞き手に報告し、話題として共有しようとする際に用いられやすい表現形式」、(3)「一身上の経験を打ち明ける際に用いられやすい表現形式」、(4)「英語、日本語、韓国語の未来の出来事を指示する表現(現在 時制、証拠性、法などの表現形式)」についての研究を推し進めた。また、(5)「アイヌ語、英語、日本語、韓国語の話題・挿話転換に用いられる言語形式」並びに、(6)「英語、フランス語、日本語、アイヌ語の再帰的な内的独話の描写に用いられる表現形式」の分析に着手し、関連する発話事象概念のそれぞれの言語によって異なる構造と共通する構造の記述を試みた。以上述べた一連の研究から、本研究課題の中心をなす発話事象概念の要素として、発話姿勢の標示、発話行為操作、主観性・間主観性の整序といった問題を更に掘り下げることが出来た。

3年目は、過去2年間の研究から得られた「発話事象概念の構成要素は、いわゆる直示的表現(時制、指示詞、往来動詞等)に加えて、広義の語用標識(文末詞、不変化詞、間投詞、談話標識等)や述語形態(発話・思考動詞、相、局面、法、証拠性等)など多様な形式で表現される」との理解をより汎用性の高いものとするために、分析対象となる言語と文法現象の範囲を更に広げて、以下に述べる四つの研究を実施した。昨年から続く(1)「アイヌ語の文末で用いられる語用標識の意味・機能を形作る概念化」に加え、(2)「韓国語・日本語・バスク語の話者が聴者に伝えようとする出来事の参与者(特に話者自身ないしは聴者がそれに該当する場合)の文法標示を必要とする感度の違い」、(3)「英語・日本語・アイヌ語の話題・挿話転換に用いられる表現の概念化」、(4)「英語・日本語・韓国語・アイヌ語・ドイツ語・フランス語・ウェールズ語・バスク語で再帰的な内的独話の描写に用いられる表現形式(reporting clause)の概念化」である。一連の研究から、本研究課題の中心をなす発話事象概念の要素として「発話意図・姿勢」というメタ言語的な概念化を認め、その標示に一定の類型性を見いだすことが出来た。

4年目は、引き続き分析対象となる言語と文法現象の範囲を更に広げて、以下に述べる六つの研究を実施した。昨年から続く(1)「英語・日本語・アイヌ語の話題・挿話転換に用いられる表現の概念化」に加えて、(2)「英語・日本語・アイヌ語の語用標識が喚起する発話事象の概念化に見られる二種類の間主観性」、(3)「韓国語と日本語で「利益提供の申し出」と「迷惑を掛けたことへの謝罪」に用いられる敬意表現の概念化」、(4)「日本語の順接・逆説の談話標識の語彙的意味と相反する語用論的機能」、(5)「バスク語と日本語金沢方言の動詞語尾に見られる聞き手の性別標示とその語用論的意味・機能」、(6)「英語・日本語・韓国語・アイヌ語・ドイツ語・フランス語・ウェールズ語・バスク語で再帰的な内的独話の描写に用いられる表現形式(reporting clause)の概念化」である。一連の研究から、本研究課題の中心をなす発話事象概念の要素として「対話や語りという発話の展開と転換」、「話者と聴者の遣り取りと談話・テキスト構成の不可分性」、「聴者への利益提供・迷惑行為の言語的明示化」という発話事象の概念化に認められる更なる要素とその標示に一定の類型性を見いだすことが出来た。

5年目は、先ず第一に(1)英語・日本語・アイヌ語・フランス語で再帰的な独話の描写に用いられる表現形式(reporting clause)の概念化を分析し、物理的・肉体的には同様な独話(発せられるもの・発せられないもの)であっても、その概念化は通常想定されている以上に言語による多様性を示すことを示した。次に(2)アイヌ語の1人称名詞化構文が語りや会話という談話の中で多様な語用論的機能を果たす一方で、それらが共通した発話事象概念によって支えられている可能性を指摘した。更に(3)主に文法的な観点から扱われて来た wh 疑問文とそれに対する回答・焦点・否定文などの表現形式について、仏、英、独、中、韓、日語に、文法的な振る舞いが異なるウェールズ語・バスク語を加えた8言語の parallel text を用いた談話語用論的な対照分析を行い、それらの表現形式に発話事象での話者と聴者の遣り取りという要素が密接に関わることを示すことによって、発話事象概念の構造的な理解を更に深めることを試みた。これらの研究から、「語りと会話に現れる異なる語用論的機能を共通して支える話者と聴者の遣り取りの概念化」、「従来は文法的な意味機能からのみ捉えられて来た形態統語的な形式と話者・聴者の遣り取りの概念化との不可分性」という発話事象の概念化に認められる新たな要素とその標示に見られる一定の類型性を導くことが出来た。

最終年度は、擬声語・擬態語と呼ばれる副詞的な形式の意味機能がこれまで想定されて来た以上に「話者と発話対象の遣り取りの概念化」に関わるようになって来たことを踏まえて、それらを扱うことが出来る形に発話事象概念の理解を修正するために、当該形式の談話語用論的な分析を行った。また、これまでの研究で得られた発話事象概念の理解とは幾分異なる概念化とその標示様式を示すことから、これまでの理解を修正し、それを踏まえて発話事象概念の類型化を試みる上で依然として必要であると考えられるモンゴル語について関連する表現のデータを収集し、分析を行った。昨年度に続いて英語・日本語・アイヌ語・フランス語等の再帰的な独話の描写に用いられる表現形式の概念化についての研究を推し進め、これらと韓国語、モンゴル語の対照も試みた。モンゴル語と同様にこれまでの研究で得られた発話事象概念の理解とは幾分異なる概念化とその標示様式を示すラオ語についても一部調査を実施した。活字になってい

ない当該年度の研究を除く、それ以前に本研究計画において実施された研究から得られた成果は、現段階でその様相がある程度明らかになっている「発話事象概念の多様な姿」とそこに見出される「発話事象概念の類型」に関する理解をまとめる形で認知言語学者に対して報告された。

当初 4 年での実施が計画されていた本研究課題は、新型コロナウイルス感染症の影響で 2 度の期間延長を経ることになったが、以上の研究成果が得られたことにより、当初の目的は概ね達せられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Katsunobu Izutsu & Mitsuko Narita Izutsu	4. 巻 227
2. 論文標題 Chapter 11. Highlighting beginning, end, or transition in-between	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Discourse Phenomena in Typological Perspective	6. 最初と最後の頁 295 ~ 336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.227.11izu	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsunobu Izutsu & Takeshi Koguma	4. 巻 24
2. 論文標題 Minimal utterance units and unbreakable "morphosyntactic" structures for asking, answering, denying, and specifying	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Pragmatics	6. 最初と最後の頁 37 ~ 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu	4. 巻 325
2. 論文標題 Presentation followed by negotiation: final pragmatic particle sequencing in Ainu	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Pragmatic Markers and Peripheries (Pragmatics & Beyond New Series 325)	6. 最初と最後の頁 77 ~ 109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/pbns.325.03izu	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu	4. 巻 70
2. 論文標題 Chapter 5. Dichotomous or continuous?: Final particles and a dualistic conception of grammar	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Human Cognitive Processing (Grammar and Cognition: Dualistic Models of Language Structure and Language Processing)	6. 最初と最後の頁 159 ~ 190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/hcp.70.05izu	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsunobu Izutsu and Yong-Taek Kim	4. 巻 1
2. 論文標題 Linguistic manifestations of fictive change participants: apparent alternations between the accusative and the dative/comitative cases in Korean and Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 107-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Katsunobu Izutsu, Takeshi Koguma, and Yong-Taek Kim	4. 巻 26
2. 論文標題 'I came,' 'I saw,' 'I am': deictic conceptions behind experience report and disclosure.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Izutsu, Katsunobu and Takeshi Koguma	4. 巻 46
2. 論文標題 Experience report starters and their evoked speech event conceptions: Conceptual overlap of interpersonal and ideational metafunctions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間文化	6. 最初と最後の頁 56-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24795/nb046_056-063	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 11件)

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu
2. 発表標題 What sound does it make?: lexico-syntax of onomatopoeic manner expressions in Japanese, Korean, and Ainu
3. 学会等名 The 56th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井筒勝信・小熊猛
2. 発表標題 You go that way, I'll go this way: 発話の出来事が多様な概念化序論
3. 学会等名 第48回福岡認知言語学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, and Takeshi Koguma
2. 発表標題 Speaking, listening, and having something in mind: self-referential manifestations of a thinking speaker in reflexive speech
3. 学会等名 The 9th International Conference on Intercultural Pragmatics and Communication (INPRA) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu
2. 発表標題 'Someone who got angry and ran away from home, I was': Narrative uses of the "verb[clause]-p(e) a=ne" construction in Ainu
3. 学会等名 The 55th Annual Meeting of Societas Linguistica Europaea (SLE 2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu
2. 発表標題 Pretended and actualized speech events: two manifestations of intersubjectivity in pragmatic markers
3. 学会等名 The 17th International Pragmatics Conference (IPrA) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsuobu Izutsu and Yongtaek Kim
2. 発表標題 Offer of benefit and apology for adversity to someone elevated: some commonality and difference in deictic object-honorific (Korean nopimmal and Japanese kenjogo) constructions
3. 学会等名 The 22nd Meeting of the International Circle of Korean Linguistics (ICKL) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mitsuko Narita Izutsu and Katsuobu Izutsu
2. 発表標題 When discursive glue comes off: Japanese contrastive and continuative connectives in spoken discourse
3. 学会等名 The 54th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europe (SLE) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Takeshi Koguma
2. 発表標題 Allocutivity as positive politeness: speaker/addressee-indexing functions of -gai[wai/zoi]-ya and -gai[wai/zoi]-ne in the Kanazawa dialect of Japanese
3. 学会等名 The Pragmatics Society of Japan 2021 Conference
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu
2. 発表標題 Marking beginning or end: Topic-shift conceptions in Ainu, Japanese, and English
3. 学会等名 The 53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, and Yongtaek Kim
2. 発表標題 Grammatical relation sensitivity: Korean-Japanese differences in final-appended structures
3. 学会等名 The 28th Japanese/Korean linguistics conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Mitsuko Narita Izutsu
2. 発表標題 Discourse particle sequencing in Ainu
3. 学会等名 The 52nd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu and Takeshi Koguma
2. 発表標題 Experience report starters and their evoked speech event conceptions intermingling interpersonal and ideational metafunctions
3. 学会等名 XIV Congreso de la Asociacion de Linguistica Sistemico-Funcional de America Latina (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu, Takeshi Koguma, and Yong-Taek Kim
2. 発表標題 'I came,' 'I saw,' and 'I am': deictic conceptions behind experience report and disclosure
3. 学会等名 The 26th Japanese/Korean linguistics conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井筒 美津子 (Izutsu Mitsuko) (00438334)	藤女子大学・文学部・教授 (30105)	
研究分担者	小熊 猛 (Koguma Takeshi) (60311015)	滋賀県立大学・人間文化学部・教授 (24201)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金容澤 (Kim Yongtaek)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------